

◆書評◆

落合恵美子著

『21世紀家族へ（第4版）』

家族の戦後体制の見かた・超えかた』

(有斐閣選書 2019年 ISBN 978-4-641-28146-2 1900円)



高山 純子

(お茶の水女子大学 基幹研究院)

本書は、「家族の戦後体制」というキーワードを用いて日本の家族変動を論じた一冊である。著者の体験談も交えながら読みやすい語り口調で展開される本書は、家族社会学の基本書としても位置付けられよう。1994年に初版が刊行されてから25年の月日が経ち、この度、第4版が発刊された。第4版では最新データへの更新や、それにとまなう加筆・修正がされたほか、『『家族の戦後体制』は終わったのか』という問いに答えるべく、21世紀の初頭の現実を論じる新たな2章が書き下ろされた。

本書の構成について説明すると、まず第1章から第5章までは、戦後の社会・経済的に安定した時期の家族を意味する「家族の戦後体制」の成立とその特徴について書かれている。第1章は戦後の日本女性の主婦化を産業構造の変化と関連付けながら説明し、第2章は「主婦とは何か」という問いに、歴史的変遷をふまえて答えている。第3章では「子ども」に視点を移し、出生

率の変遷とそれにもとづいた子どもの価値の変化について論じており、戦後のライフコースの画一化、すなわち、みなが結婚し子どもを2、3人もつとといった「再生産平等主義」の社会の確立を指摘している。第4章は戦後の家族体制の人口学的特殊性に着目し、それがもたらした核家族化、および家族の社会的ネットワークの変化について説明されている。そして第5章は、多くの人びとが自明ととらえる「家族」の形を「20世紀近代家族」と位置づけ、「家族の戦後体制」はその日本での成立であるとまとめている。

第6章以降は、「家族の戦後体制」のその後が論じられる。ウーマンリブ(第6章)、ニューファミリー(第7章)、育児不安をはじめとした親子の問題と育児ネットワークの再編成(第8章)、親族関係の双系化と「家」のゆくえについて(第9章)と取り扱うテーマは幅広い。しかし残念ながら、ここでは紙幅の関係で各章の詳細を示すこ

とはできないため、以下では表題にもある「21世紀家族」がどのようなものになるかを論じた第10章、および第4版で新しく追加された第11、12章の内容を中心に紹介しながら、評者からの若干のコメントを加えさせていただく。

第10章「個人を単位とする社会へ」では、家族や世帯を中心としたこれまでの社会福祉制度を改め、個人を中心とした「ライフスタイル中立的」な社会制度の確立をめざすべきだと主張されている。この章で注目すべきは、そのような社会において主婦がどのように位置づけられるかを論じた最後の節で、第3版から加筆・修正がなされている。第3版では、上記の社会の実現には「主婦の座の保護をはずす」ことが必要であると述べているが、主婦になることを「自由な選択」とみなし、主婦の存在の保護が女性の自立を阻害する要因であるとするような記述は、やや一面的であるように思われた。主婦の座の保護をはずしたとして、ケアを担う人びとがただちに「個人」として「自立」することは容易ではないからだ。特に日本社会においては正規／非正規の賃金格差が大きいこと、正社員に無限定的な労働を強いることなど、さまざまな問題がある。これに対し第4版では、ダイアン・セインズベリの主張を引用し、「ケアする者としての資格付与（231頁）」をすることで社会保障制度の枠内に包摂することができる、と論を進めている。ケアの担い手の「二次的依存」の問題を視野に入れ、

このような論点を取り入れられたことは意義深い。

そして第11章（「家族の戦後体制は終わったか」）では、現代の日本社会において、女性の脱主婦化、再生産平等主義の崩壊、「家」の終焉という3つの特徴が認められることから、「家族の戦後体制」は変容したのだと結論付けている。しかし、それでも多くの人が「変化していない」というような実感をもつ理由を、最終章となる第12章「20世紀システムを超えて」で考察している。著者によれば、それは「現実の変化とそれにもかかわらず強固に維持される家族主義的な制度とのギャップ（270頁）」から生まれており、そのような日本社会のあり様を「縮んだ戦後体制」と呼ぶ。企業単位と家族単位の制度が残る日本では、そのシステムの外側に多数の包摂されない人を生じさせてしまう。これからの日本社会で労働力として期待される「女性」や「移民」の処遇も、今の日本の構想では「縮んだ戦後体制」を維持したものでしかない。

このような状況をふまえ、著者は新しい発想やビジョンが必要だと訴える。具体的には、「20世紀的な標準をはずれて多様な人生を送る人たちを包摂することのできる社会制度（282頁）」と、それを実現するために「社会のさまざまな場所にいる人たちがつながり合えるようにする（294頁）」ことを呼び掛けている。しかし、その「つながり」がどのようにして実現できるか、という次に投げかけ得る問いへの答えは具

体的に示されなかった。もちろんその問いは著者だけに課せられるものではなく、それこそ、さまざまな立場の人が共に考え導き出していくものであると思うが、評者自身はこの点が非常に重要かつ難しいと考えるため、著者のお考えを知りたかった。実際に本書のエピローグでは、「つながること」の難しさをうかがわせる出来事が紹介されている。詳細はぜひ読んで確認していただきたいが、女性内の「分断」を示すそのエピソードを拝読し、思い出したことがある。スイスのフランス語圏にこの2年ほど暮らしている評者は、日々の生活の中で“solidarité (連帯)”という言葉をよく耳にする。文脈によっては「連帯」という言葉を用いるのは大げさすぎるように感じることもあるのだが、それほどこの言葉が多用される背景には、人びとがあらゆる「分断」の存在、もしくはその可能性を当たり前で認識しているということがあるのではないかと思いついた。翻って日本で、民族にせよジェンダーにせよ、マジョリティーとマイノリティーの「分断」、さらにはマイノリティー内の「分断」の存在は広く人びとに受け止められているだろうか。「標準」とそれ以外、という二分法だけでなく、遠回り

であってもあらゆる「分断」の内実に向き合うことによって、「連帯」への道が拓けるのかもしれない。そしてそのためには、本書がそうであるように、僻することなく現状を認識し、歴史や諸外国の事例に学ぶことが必要であり、そのうえでそれぞれの社会に適した合意が形成されていくのだろう。

本書はすでに英語、韓国語、中国語の翻訳版が出版されているが、今後もより多くの国内外の読者を獲得することと確信している。家族の歴史の変遷という第一の視点、アジアやヨーロッパ諸国との国際比較という第二の視点に加え、版を重ねるごとに著者が自ら打ち出した理論や仮説を再考していくプロセスの追跡、という第三の視点によって、本書は「家族」のリアリティを立体的に私たちに示してくれる。特に第三の視点がとても面白い。だから、この本を手にとった方にはぜひ目次の前にある各版の序文やプロローグ、エピローグも本文同様に熟読することを薦める。本書が今後、さらに版を重ねていくことを願い、新しい日本社会が今後はどのように著者によって分析されるのか、拝読するのを楽しみに待ちたい。